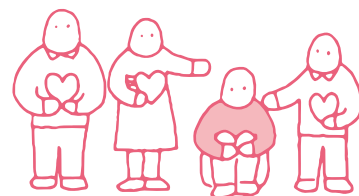




認知症とともに**幸せ**に生きる

認知症の人も、支援する人も幸せになる社会のあり方を
いっしょに考えませんか？

はじめに	02
1 パーソンセンタードケアから互恵ケアへ	03
2 認知症になっても、地域で普通に暮らすために	19
3 多世代・他の社会的弱者も包括する支援で互恵社会を	35
4 研修会参加者の声	41
おわりに	49



はじめに

2014年11月に「新しいケアと予防のモデル」をテーマに日本で開催された認知症サミット後継イベントでは、各国の共通認識として認知症の人の社会参加をする地域作りが各国共通の課題として再認識され、2015年に発表された認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)では、認知症の人の意志が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現をめざすことが基本理念として呈示されました。

そうした社会の実現に向けて、市民の協働が期待されています。病院・施設の外の社会における認知症支援とは社会参加に向けた支援であり、認知症を含む社会的弱者が主体的に参加することのできる社会をいかに創っていくのか、それを考え試行錯誤を重ねていくことが認知症支援ボランティアの活躍の前提となります。

認知症の知識を習得するだけでは、社会に根づいた支援を継続し、地域に広げていくことは困難な面があります。認知症の人も、“認知症”である前に“人”です。社会での支援は、それぞれの“人”への支援ですので、何よりも“その人”との関係性が重要です。認知症のあるなしにかかわらず、“人”と“人”の関係性をつなげていく、これは地域社会そのものです。

地域は、そこに暮らし、働き、学ぶ多様な人達が、共に考えて、手を動かしながら作っていくものです。幅広い発想と地に足のついた行動力が必要なのです。認知症の人が自分らしく暮らし続けることができる社会は、他の全ての住民にとっても暮らしやすい社会に違いありません。いっしょに高齢化社会を明るくする提案を考えませんか？

